

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集

「新しい日伯関係」

- ・第19回経済合同委とテメル訪日後の日伯関係を占う
- ・ジャパンハウス・サンパウロ
南アメリカにおける現代日本の発信・普及
- ・ジャパンハウス初耳学

あの町この町

フォルタレーザ



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

[Business innovation-2]

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



三井物産株式会社 www.mitsui.com/jp

目次

(あの町この町) フォルタレーザ [山崎圭一]	3
(ブラジル・ナウ) 2020年東京大会の成功に向けて [小池百合子]	5
【特集】新しい日伯関係 第19回経済合同委と テメル訪日後の日伯関係を占う [大前孝雄]	6
【特集】新しい日伯関係 ジャパンハウス・サンパウロ 南アメリカにおける現代日本の発信・普及 [アンジェラ・タミコ・ヒラタ]	8
【特集】新しい日伯関係 ジャパンハウス初耳学『【ブラジル特報】編集部』	10
【特集】新しい日伯関係 無法松リオへ行く人力車による日伯交流の試み [田中喬祐]	11
連載・ブラジル現地報告 フランス芸術使節団と ジャン＝バティスト・ドブレの残した功績 [仁尾常刀]	12
(日系企業シリーズ・第45回) ダイソーブラジルの挑戦 [大野恵介]	13
(ビジネス法務の肝) ブラジル経済の現状と将来への期待 [松田純一]	14
連載★税務の勘どころ ブラジルM&Aの留意点について [片岡万枝]	15
(連載エッセイ) 社会統合の炎を象徴するオリンピック聖火 [小川彰夫]	16
(ウーマン・アイ) 現代の“アマゾネス” [武田真由子]	17
(ジャーナリストの旅路) 15年ぶりに見つめ直すブラジル [山本太一]	17
(連載文化評論) 追悼：宮尾進さん ブラジルを考え続けた哲人の死 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識)「ブラジルはフィデルの陰の応援団？」	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の
「表紙のひとこと」
「ミナスジェライス州の古都、マリアナの教会でおこなわれた日曜礼拝の様子。無心に祈りを捧げる少女たち。その澄んだ瞳にはこの国の行く末はどのように映るのだろうか。新たな年を迎え、ブラジルは再び大きく変動しようとしている。」(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

フォルタレーザ

セアラ州の州都フォルタレーザ市(以下F市と略す)の第1の印象は、現代的国際都市だということ、空港が、こじんまりとしているが、綺麗だ。F市は地理的に欧州に一番近い州都である。空港は北米や欧州の都市に直行便がある国際空港だ。F市は、欧米とブラジルをつなぐ「空の玄関」なのである。ただしレシーフェ市やサルヴァドール市などにも国際空港があり、空港間の競争がノルデスチ地方内で展開している。

第2の印象は高層建築物のスカイラインである。F市の海外沿いは高層のオフィス・ビルと高層マンションが密集している。F市の現在の人口は約250万人で、市面積は約314km²。人口密度は約7800人/km²と高い。それは、2万人近い東京都心ほどではないが、名古屋市、福岡市、神戸市などの一部に匹敵する高密度である。ノルデスチ地方の他の州都の沿岸部のスカイラインも、F市のそれに似ている。景観の違いは、たとえばレシーフェ市では数々の素敵な橋を見かけるが、F市は橋を売りにしていない。

第3に、海岸の観光資源がすばらしい。市の中心地近くにヨット・ハーバーがあり、オシャレな雰囲気をウォーター・フロント地区に与えている。中心地から少し離れると、砂丘があり、そこで私は初めてレンタルのバギー車を乗り回す遊びに興じた。たくさんあるビーチも魅力的で、ある浜では、浅瀬の砂が波の影響で美しい模様を刻んでいた(写真参照)。

ちなみにF市にはセアラ州のGDPの48%が集中している。一極集中といってよいので、同州の地域バランスとしては、経済活動の地方への分散が課題である。この州は、植民地時代には内奥地のソブラル市やクラト市などが先進地域だった。これらの地域は歴史に埋もれたわけではなく、昨今大手製靴企業Grendene社の工場があるなど(ソブラル市)、靴の産地として注目されている。このようにF市以外の州内地方都市に発展のネタがあり、F市への一極集中緩和の潜在的可能性はある。

将来もしブラジルに住むことがあるとすれば、魅力的なフォルタレーザ市は、間違いなく有力候補地である。



山崎圭一
(横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授)

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

2020年東京大会の成功に向けて



リオデジャネイロ大会を踏まえた今後の取組

16年の夏、リオデジャネイロの地では日本選手が大いに活躍をし、オリンピックでは史上最多41個、パラリンピックでは24個のメダルを獲得し、日本中が感動と興奮で満ち溢れた。これは、現地での日系人の方々の応援や様々なサポート面でのご尽力の賜物であり、この場を借りて感謝申し上げる。

私も、次回開催都市の長として2度に渡ってリオに赴き、全世界が見守る中で、大会旗をエドゥアルド・バエス・リオ市長から受け継いできた。リオではオリンピック・パラリンピックの両大会を通して、実際の大会運営や輸送、セキュリティ、ボランティアなど、多くのノウハウをつぶさに拝見し、学ばせていただいた。

施設整備の面においては、大会で使用した施設の資材を4つの小学校の建設資材に活用するという話を直接聞き、実際にその会場を視察することが出来、とても参考になった。

また、IOCのバッハ会長、コーツ委員長などと話をする機会を得、今後の東京大会に対する希望や、リオ大会を通じて学ぶべき点などを伺うとともに、私が主張してきた3R (Reduce, Reuse, Recycle) にも通じる話し合いが出来たことはとても意義深いものであった。

これらの経験を踏まえ、東京大会の運営には「もったいない」の思想を取り入れ、この言葉を、東京・日本を象徴する言葉として世界に広めていきたいと考えている。

東京2020に向けたボランティア

大会運営を支え、また、世界中から訪れる方々をもてなす9万人以上のボランティアの仕組みづくりも不可欠である。リオではボランティアが観客の整理・誘導をはじめ様々な業務に携わる様子を間近で視察し、直接話を伺った。印象的であったのは、ボランティアが皆誇りに満ち、選手・観客に笑顔で接していたことである。東京大会に向けては、ボランティアの参加気運と一体感を高め、誇りとおもてなしの心を持って活躍できるよう計画的に取り組んでいきたい。

また、東京大会は、高齢者や障がい者に優しいユニバーサルデザインのまちづくりを推し進め、「ダイバーシティ」を実現する絶好の機会である。ボランティアの研修を通じて、質の高いおもてなしを行い、年齢や障がいの有無に関わらず、誰もが大会に参加し、大会を楽しめる環境をハード・ソフト両面で整備していく。

競技会場の内外で様々なボランティアが一体となって役割を果たし、大会を成功に導くとともに、貴重なレガシーとし

て都内にボランティア文化が定着するよう、全力で取り組んでいく。

フラッグを活用した気運醸成の取組

都庁第一本庁舎2階では、これまでの開催都市間で引き継がれてきたオリジナルフラッグの展示も行っている。オリンピックフラッグについて言えば約50年ぶりに再び日本にやってきた。都民・国民の皆様には是非、このオリジナルフラッグをご覧いただき、オリンピック・パラリンピックを自分たちの大会だと感じていただきたい。

4年後にせまった東京2020大会開催に向けて、準備を加速するとともに、気運醸成の取組の一つとして、フラッグツアーも実施している。フラッグツアーは、東京都内の区市町村をオリンピック・パラリンピアンが旗とともに巡回し、お披露目していくことで、地域に祝祭感を届けることを目的に実施している。また、被災地復興の観点からも去る11月2日には私自らフラッグを持参し、福島県を訪問してきた。今後、被災地をはじめ全国を巡回していくようにしたい。

2020大会その先へ

2020年大会を成功に導くためには、「復興五輪」と「オールジャパン」という視点が重要である。

まず、「復興五輪」だが、大会の招致活動は東日本大震災が起こった2011年に始まり、その中で、スポーツの力が被災地に夢と希望をもたらすことを訴えた。被災地の復興なくして大会の成功はない。常に復興五輪の原点に立ち返り、スポーツの力で、改めて被災地に元気を届けるとともに、力強く復興へ歩む姿を世界に発信し、大会を通じて世界の人人に感謝を伝えていきたいと考えている。

次に「オールジャパン」の視点だが、これは復興五輪の理念を実現するためにも重要なものと考えている。大会は、東京や被災地をはじめ日本各地の魅力を世界にアピールするまたとない機会だと思っている。このチャンスを有効に活用し、大会の効果を全国に波及させ、日本全体に良きレガシーを残していくことが必要だ。

2020年大会まであと4年、国や組織委員会ともしっかりと連携し、オールジャパンで力を合わせ、2020年大会を、東京、日本はもとより、世界中の誰もが記憶に残る大会としたい。

小池百合子(東京都知事)



第19回経済合同委と テメル訪日後の日伯関係を占う



大前孝雄
(当協会会長)

2017 年は日伯双方が「新しい関係強化」を図る年になる。ブラジルの政治・経済情勢が混迷を深める中、16 年 8 月末、ルセフ大統領の弾劾が成立、新たにテメル政権が誕生し大きな転換期を迎えた。かかる状況の中で、16 年 10 月 3 日～5 日、日伯経済界の対話の枠組みである第 6 回日伯賢人会議と第 19 回日伯経済合同委員会が相次いで東京で開催され、更に、その 2 週間後にはテメル大統領が訪日、経団連にて日本経済界トップとの懇談の場が持たれるなど、官民双方で両国経済関係強化に向けた活発な議論が展開された。

賢人会議では 両国首脳への提言で合意

日本とブラジルは 120 年を超える外交関係・友好関係の下、農業、資源・エネルギー、インフラ整備、製造業など幅広い分野での協力を通じ緊密な関係を構築してきた。この 10 年間で両国間の貿易量は増加し、現在約 700 社の日本企業がブラジルで事業活動を行っているが、未だ日本の順位は相対的に高いとは言えず、南米最大の経済規模を誇るブラジルと世界第 3 位の経済大国である日本の間には、更なる連携・協力関係拡大の余地がある。

かかる認識の下、今回の賢人会議では「日本はブラジルに対し、その大きなポテンシャルが故に、今後の海外事

業投資先として大きな期待を持っているにも拘わらず、投資が伸びないのは何故か、どう対応すればよいのか」――これが議論の中心となり、低迷するブラジル経済の背景にある「ブラジル・コスト」の問題、政治的混乱、世界経済の停滞などが議論された。

今後、ブラジルが成長軌道に復帰するためには外国投資が不可欠であり、外資の誘因となる政治・社会の安定化、投資環境の改善、競争原理の導入、人材育成等の充実が急務であることが改めて確認された。今回誕生したテメル政権が安定した政治基盤となることを両国経済界は強く期待しており、賢人会議として、両国が成長軌道を進む上でお互いが不可欠のパートナーであることを強く意識し、今後とも両国の共通課題について議論を深め、両国首脳に提言を行っていくことで合意した。

この賢人会議での提言内容を踏まえ、10 月 4～5 日に経団連とブラジル全国工業連盟（CNI）が共同で開催した第 19 回日本ブラジル経済合同委員会（以下、日伯経済合同委員会）においては、最優先課題と位置付けられた二国間貿易・投資自由化の推進、ブラジルでのビジネス環境の改善、インフラ整備を中心に分科会方式で深掘りの議論が行われた。以下でその概要を紹介しつつ、今後の日伯経済関係の在り方について見解を述べたい。

貿易投資自由化の推進

16 年 2 月に署名された TPP（環太平洋パートナーシップ協定）は、トランプ次期米大統領が脱退を示唆する中、その発効見通しに暗雲が立ち込め始めたが、同協定が目指すアジア、北



日伯経済合同委員会で演説する飯島・日本側委員長

米、中南米をカバーするメガ自由貿易圏の形成をはじめ経済のグローバル化が急速に進む中、日本の経済界はブラジルもこのような貿易投資自由化の流れに合流すべきであると考えている。

他方、ブラジル経済界も、成長戦略の一環として、自国企業をグローバル・サプライ・チェーンに組み込むとの観点から、日本との経済連携に強い関心を示しており、今回の日伯経済合同委員会の場でも、アンドラーデ CNI 会長より、一刻も早い日伯経済連携協定（EPA）の締結に向けた検討を急ぐべきとの見解が示された。経団連と CNI が 15 年 9 月に発表した共同研究報告書『「日本ブラジル経済連携協定」実現に向けたロードマップ』に基づき、引き続き包括的で質の高い日伯 EPA の早期実現に向け取組んでいきたい。

また、これと合わせて、日伯投資協定の早期締結についても議論を進める必要がある。これが先行して実現する場合は、将来、これを日伯 EPA の投資章に組み込むことも念頭に、投資前段階における内国民待遇の保証、ローカル・コンテンツ要求や送金規制等の緩和・撤廃等について定めた実質的な内容とすることが重要と考える。

日本側から自動車産業を事例としてブラジルの産業競争力強化の在り方に言及、具体的には、環境対応車を普及させるためのローカル・コンテンツ要求の緩和、生産コスト削減のための設備等の関税削減などを提言した。また、在ブラジル日本商工会議所が推進中のビジネス環境整備に関わる活動（AGIR）も伯国開発商工省、CNI を巻き込んだ具体的進捗を見せている。ビジネス環境の整備は貿易・投資の促進

と表裏一体であり、その推進を通じて日伯 EPA や二国間投資協定の早期実現に向けた基盤を形成していきたい。

テメル大統領の 呼びかけはインフラ整備

国土が広大なブラジルは、内陸部から外港への物流コストが必然的に割高となり主要輸出品である穀物の価格競争力をそぐという、いわゆる「ブラジル・コスト」の問題を抱えており、これを解消するためにも物流インフラ整備が最優先政策課題と位置付けられている。テメル大統領は、「インフラ整備を全て政府で担うことは不可能である。鉄道、道路、港湾、空港、石油・ガスなどのコンセッション案件が広く民間に開放されている」として、ブラジル政府が推進を目指す「投資パートナーシップ・プログラム」（PPI）への日本企業の積極的な参加を呼びかけた。民間のノウハウと資金を活用してインフラ整備を推進する上では、第一に、官民の適切なリスク・責任分担の枠組が不可欠である。また、入札については、価格のみならず品質やライフサイクル・コストが適正に評価される等、透明性の高い制度の整備なども重要である。

なお、現在、日本企業が推進中のプロジェクトを含め、いくつかのインフラ案件が、ブラジル経済社会開発銀行（BNDES）によるファイナンスの中断によって滞る事態が生じている。テメル大統領も、「ブラジルは多くの政治的・経済的困難に直面しており、日本からの投資も悪影響を受けたことは否定できない」と事情を認識しており BNDES からの長期融資の再開などブ

賢人会議の参加者たち



ラジル政府主導による具体的な解決が強く望まれる。

イノベーションと技術

現在、わが国はイノベーションを経済発展の基盤と位置付け様々な取組みを進めているが、ブラジルにおいても経済発展や国民生活の向上を図る上で新技術の導入が求められている。今回の経済合同委員会でもブラジルの豊富なサトウキビを活用したバイオ・エネルギー、高効率石炭火力発電、航空・宇宙、スマート・シティといった分野での協力の可能性が模索されたところである。ブラジルにおける技術ライセンスの使用料や契約期間の上限に関する規制の見直しが進めば、これらの分野における日本の協力もより一層進展するものと期待される。

テメル大統領は、「ブラジルは消費市場としても生産拠点としても有望であるが、それだけで外国投資を誘致することはできない。法的安定性、予見可能性の確保に努めるので、生まれ変わったブラジルに対して積極的に投資してほしい」と強調されていた。

16 年 8 月末に大統領に就任して最初の訪問国の一つに日本を選んだことも、わが国に対する期待の現れと言える。日本の経済界としても、新政権下のブラジルとの一層の経済関係強化に取組んで行きたい。



ジャパンハウス・サンパウロ 南アメリカにおける現代日本の発信・普及



アンジェラ・タミコ・ヒラタ
(ジャパンハウス SP 事務局長)

JAPAN HOUSE

ジャパンハウス・サンパウロは、ブラジルと日本間で文化普及とアイデア交流を促進する目的で設立されたものであり、ブラジル人に対して、知られる日本、コンテンポラリーな日本、魅力たっぷりの日本を提示していきたいと考えている。だが、どうやって21世紀の日本を表現するのか？ 日本的価値やそのエッセンスを如何に提示するのか？ こうした疑問符に答えるのが、日本政府のイニシアティブによるグローバル事業であるジャパンハウスのミッションである。

日本人の繊細さは長い年月のなかで磨かれてきたが、豊かな自然に対する畏敬の念も同様に育まれてきた。日本では、自然を尊敬し自然と調和的に生きることを学ぶが、このため

様々な自然の脅威に対峙することも可能になる。伝統を尊ぶことで、過去から大事な教訓を得て将来に生かすことも学んできた。

さて、とはいえ、一つ疑問が生じる。こうした価値をどんな環境空間で表現するのか？

このスペクタクルの舞台になるのが、ジャパンハウスである。この新機軸プロジェクトが設置される三都市は、ロンドン、ロサンゼルス、サンパウロ、である。2017年上半期にオープン予定のジャパンハウス・サンパウロでは、アート、教育、テクノロジー、食文化、ビジネスなどが、一つの豊潤なスペースで同時に調和的にエンジョイできることになろう。ジャパンハウスは、日本の歴史的ルーツや伝統も加味したうえで、21世紀の日本を翻案・発信したい。ジャパンハウス・サンパ

ウロの美的特徴は、国際的に著名な建築家隈研吾氏のプロジェクトに日本的要素とブラジルの要素を編み込んだ点にある。

隈研吾氏のプロジェクトは、木材や紙といった自然素材をクリエイティブに活用することで、軽快かつ光り輝くスペースを創造し、日本文化の浸透という舞台における主役を演じる、という構想に基づいている。ジャパンハウスのファサードは檜木造りで、日本の職人たちによって手作りされた「木のカーテン（格子）」とブラジル・ノルデスチ（レシーフェ市）のモダニズム建築のベースといえる「コボゴー」と呼ばれる中が空のセメントブロックとの組み合わせ、すなわち“日伯混合”建築物だ。ファサードは檜木のアローマと太陽光の具合で変化する色彩との組み合わせが魅力を醸しだし、大都市の“喧騒”と“静”が対位している。竹が建物全体を取り囲んでいるが、竹はアジア（日本）原産にしてブラジル原産でもあるので両国を象徴している。

この繊細にして美しい建物環境は、一階から三階までの総面積は2,500㎡以上で、日本文化をより知りたくてやってくる、ブラジルや南米諸国からの人々が出会いをエンジョイできる、繊細にして便利なスペースを創り出すことになる。私どもとしては、ジャパンハウスを訪ねてくださる方々に日本



工事中のジャパンハウス 12月4日撮影 写真提供：一ノ瀬浩司氏

の特有な魅力を味わっていただき、この唯一無二の環境で、色彩、形態、食味、手触り、香りを体感していただけたらと願っている。日本に在る豊かな文化は、このジャパンハウスの壁の隅々まで反響し、訪問者を何回も驚嘆させ、日本文化に対する関心を更に深めることになると思っている。

ジャパンハウス・サンパウロは、様々な展示会、講演会、セミナー、文化イベント、アーティストのライブ演奏などを行っていくが、とりわけ歴史や人的相互交流に留意したい。日本からアーティスト、科学者、スポーツ選手、ビジネスマンからシェフや市民団体リーダーまで、様々なプロフィールを有する人物を招聘していく。建物のなかには、一流和食レストランやカフェテリア、さらには民芸品や日本製品の「ポップアップストアー」も設置される。この担当キュレーターはマルセロ・ダントスだ。彼は、サンパウロの「ポルトガル語博物館」やコロンビアの「カリブ博物館」、ベルリンの「民俗博物館」などを手掛けており、この分野では手堅い実績を残しているベテランだ。

今一度、ジャパンハウスの概要をメモしてみよう。ジャパンハウス・サンパウロの中庭は通りに向かってオープンになっており、そこから地上階（1階）のいくつものスペースにつながっている。エントラスホールにはカフェテリアが設けられ、150名まで収容可能な多目的スペース、日本文化関連の書籍を主体に書庫に収めた図書室、そして庭園、だ。1階（日本的には2階）

は、セミナー用の講堂で、講義なり講演会なりシンポジウムなどで多くの人たちが出会う場、フレキシビリティに提供いただけるスペース環境を提供する。2階（日本式には3階）は、外部の騒音が届かない場所なので、ゆったりとした環境で、アートの展示会なり歴史関連の展覧会などが行えるスペースとなっている。

こうした素晴らしいスペースを通じて、様々な情報が交換され、歴史が深耕され、文化交流が展開される。ジャパンハウス・サンパウロは、日本からブラジルに贈られたプレゼントだが、日系コミュニティのおかげで確固たるものとなっている二国間の絆を尊重したうえでのプレゼントである。ブラジルが、日本の国外で最大の日系をルーツとする人口を有する国であることは、ここで改めて強調しておこう。だからこそ、二国間の経済関係も社会関係も人的交流関係も強靱なものであり、ブラジルにおける日本のイメージはポジティブであり、ブラジルは親日国となっている。このジャパンハウスという新しい事業を通じて、日本とブラジルという二国間の関係を新しい視座から更に拡大・深化していきたいと考えているが、この関係強化によって、文化・社会・商業分野における平和と調和の関係基盤を一層堅固にして強力なものにしたいものだ。

私自身のことをいえば、民間企業で長年にわたってブラジルと日本という二国間のビジネス・プロモーションの

プロとして働いてきた人間だが、そんな経験者として申し上げると、このジャパンハウスという新事業の先頭に立つという機会をいただいて、大変満足というか心から嬉しく思っている、と改めて記しておきたい。ジャパンハウスを設置する場所として選ばれた三都市の一つにサンパウロを選定していただいたということは、ブラジルに対する信用を再確認していただいたのであり、ロングタームの視点に基づいて選定していただいた、と理解している。更に申し上げれば、日本政府がブラジルとの関係強化の重要性を再表明していただいたのである。

次の世代のことも考慮に入れて、ジャパンハウス・サンパウロを通じて、ブラジルから南米全般へ、日本プロモーションの新しい可能性を開拓しようと考えている。文化の持つパワーのおかげで諸国民の関係親密化が図れると信じているが、新しい将来を作り上げるためにも様々な経験や知識の相互交流は重要だし、その潜在的可能性はもっと注目されるべきであろう。そんな未来のためにも、様々な国々のあいだでの、相互に尊重しあう友愛的共生が具現化されなければならない。

日本文化は新しい文化を創造する原動力である。ジャパンハウス・サンパウロはイノベーションを生み出すだろうが、重要なことは、このエネルギーが広範囲に伝播し、訪問者の方々がこのポジティブパワーを吸収して新たな文化創造に参加していただくことだろう。（編集部訳、原文はポルトガル語）



ジャパンハウス完成予想図

ジャパンハウス初耳学

『ブラジル特報』編集部

1. ジャパンハウスとは？

外務省 HP によれば、「ジャパンハウスは、日本に関する様々な情報がまとめて入手できるワンストップ・サービスを提供すると共に、カフェ・レストラン、アンテナショップ等を設置し、民間の活力、地方の魅力なども積極的に活用したオールジャパンでの発信を実現し、専門家の知見を活用しつつ、現地の人々が「知りたい日本」を発信することをコンセプトとした新たな発信拠点です。」

2. ジャパンハウスの目的は？

同 HP によれば、「オープンな施設にすることによって、従来日本への関心が必ずしも高くなかった人々を含めた幅広い層に対し、日本の「正しい姿」や多様な魅力を発信しながら親日派・知日派の裾野を拡大していくこと」を目的としている。

同省の別の資料によれば、「戦略的対外発信の強化」、日本の「正しい姿」の発信、日本の多様な魅力の発信、親日派・知日派の育成、が目的である。

3. ジャパンハウス予算はいくら？

平成 27 年から 30 年までの 4 年間でコミットした、ジャパンハウス予算は 36 億円である。

4. 設置する都市はどこ？

ロンドン、サンパウロ、ロサンゼルス の 3 都市。

5. ジャパンハウス 3 か所の特徴、差別化は？

各都市の特徴に合わせたテーラーメード（和製英語では、オーダーメード）型設計を目指すようになっており、都市別では、ロンドン＝知識層や経済関係者を取り込み、国際社会にも発信。ロサンゼ

ルス＝娯楽を中心に、様々なコミュニティ全般を幅広く取り込む。サンパウロ＝日系社会と連携し、日本経済のプレゼンスを拡大。

6. ジャパンハウス・サンパウロの場所は？

現地表記では Av.Paulista 52 であるが、サンパウロの丸の内といえるパウリスタ大通り 52 番とは、地下鉄ではライーゾ駅が最寄り駅となる。

7. ジャパンハウス・サンパウロの建築としての特徴は？

隈研吾氏の設計によるファサード（建物の正面）が斬新にして奇抜。伊勢神宮の横の山から伐採した檜木を使用し、格子状に木のカーテンを繋ぐ「地獄組み」という日本独自の技術を生かした構造になっており、建物の内部は、龍安寺中庭をイメージした「外土間」と呼ばれる空間を配置している。檜木や和紙といった自然素材を活用した和風にしてポストモダンの建造物になっている。

8. 館長、事務局長、運営委員、アドバイザーは誰？

館長：ルーベンス・リクベロ
（外交官、元財務大臣）

事務局長：アンジェラ・タミコ・ヒラタ
（元アルバルガタス貿易本部長）
（事務局は 15 名体制）

運営委員（9 名）

- ①青木智栄子（ブルーツリーホテル社長）
- ②カイオ・ルイス・デ・カルヴァーリョ（Band TV 社長、元観光大臣）
- ③呉屋春美（ブラジル日本文化福祉協会会長）
- ④松永愛一郎（ブラジル日本商工会議所会頭）
- ⑤ジョアン・ローダス（元サンパウロ大学学長）
- ⑥ロベルト・ロドリゲス（元農務大臣）
- ⑦渡部和夫（元サンパウロ高裁判事）

⑧ジーコ（元サッカー日本代表監督）

⑨中前隆（運営委員長、サンパウロ総領事）

アドバイザー

①フェルナンダ・タカイ（歌手）

②ミルトン・マツモト（ブラデスコ銀行役員）

③タイス・オヤマ（総合週刊誌ヴェージャ編集長）

9. 事務局長アンジェラ・ヒラタさんとはどんな人？

1944 年生まれ、サンパウロ州マリリア出身の日系二世。マーケティングや企業経営の分野では日系人ビジネスウーマンとしては恐らく最も有名な人だ。無名に近かったゴムサンダル・ハバイアーナを優良世界ブランドに育てあげた手腕は、ブラジルばかりか海外でも注目されたスーパーレディであり、アマゾン原産素材を使った環境にやさしい製品を開発したアマゾン・ライフ社などでは社長として活躍している。そんなビジネスのプロも少女時代は、「少女クラブ」や「少年クラブ」を読みふけて日本語を学んだとか。このジャパンハウス事務局長としては専任であたっている。

10. 館長ルーベンス・リクベロさんとはどんな人？

1937 年サンパウロ出身、外交官としては在米大使ほか、1994 年のリアルプラン導入時の財務大臣。外交史や世界経済に関する著書も数多く刊行しており、現在は、フェルナン・ブローデル・インスティテュート理事長を務めている。

11. オープン予定はいつ？

現時点でのオープン予定は 2017 年 5 月。

12. 創設・運営受託業者は？

電通（4 年間の随意契約）。

無法松リオへ行く 人力車による日伯交流の試み

田中喬祐
（23 歳、えびす屋
浅草店俣夫）

車椅子を提供して下さった JINRIKI 様



私は、2016 年 8 月に約一ヶ月ブラジルのリオデジャネイロへオリンピック期間、仲間 13 名と共にやってきた。東京五輪で何かしたいという人は多い。しかし、何かしたいだけでは何もできない。自分たち若者に何ができるかを考えた時に、オリンピックそのものの自体を生で見たことも経験したこともないから 2016 リオへ経験しに行こうということからはじまり、東京・大阪から 10 代 20 代の若者が集まり「リオ五輪研修プロジェクト」が誕生した。2015 年秋から約 10 ヶ月の準備をして皆実費で活動経費を任ない、スポーツトレーナーや栄養士を目指す学生など多種多様な人たちが協力し合い活動をした。私はこのプロジェクトを通して、普段はえびす屋人力車浅草店で引いている「人力車」という乗り物を持って行き、オリンピックパークという競技会場間や日本文化を発信する JAPAN HOUSE、コパカバナーナビーチなどで、スポーツ観戦しに来た方々を中心に人力車に乗せて走り回ってきた。しかし、人力車を日本からブラジルを持っていくことは金銭的にも時間的にもとにかく困難だったため、考えて考えた結果、株式会社 JINRIKI 様にご協力して頂き車椅子を改造し人力車に見立てて持っていくことにした。

初めてのブラジル。初めてのオリンピック体験だったが、1 週間で約 200 人以上の方々に「人力車」に乗車をして

いただき楽しんでいただいた。時折、人力車待ちの行列もできてしまい、嬉しかったのと同時に待たせてしまい申しわけない気持ちもあったが、振り返ってみるとリオまで行って本当に良かったと思っている。乗車されたお客様の半分は世界各国からリオへ来られた方で、残りの半分はリオの地元の方々である。言語も異なれば文化も異なるリオで皆様に楽しんで頂けたのは何故だか私にもわからない。ただ 1 つだけ言えることは、普段の浅草での俣夫のおもてなしがリオで通じたということだと思う。

活動を始めた 2015 年当初は、「リオに行く意味があるのか」「無理だろう」「危険すぎる」「若者 1 人に何もできない」「人力車の需要なんてない」と散々言われたものだ。しかし、実際現地でやってみると新しい発見が見つかった。オリンピック会場は広い。BRT（高速バス）の駅から降り、セキュリティを抜け、会場へ。それだけでもお年寄りも子供も車椅子の人も片道 1km は歩かないといけない。試合を見るまでもが一苦労だ。そのバス停から会場までの間、人力車を走らせる。また、JAPAN HOUSE の中では多くの日本をアピールする技術や文化のブースが設けられており、日本酒や茶道体験、着物の着付けや習字教室などの日本文化の体験ができるようになっている。また、日本選手団の写真やサイン、日本からの応援メッセージもあれば隣ではステージがあり毎日イベントが開かれている。そこを人力車でガイドしながら走らせる。それによって、それぞれの点と点が繋がり 1

つの線となり ALL JAPAN を味わうことができる。結果として、小さな価値は生み出せたのではないかなと思う。今回のリオでの活動で得られた経験と学びは今までの人生 23 年間にはなかった大きな価値があった。

私は 2020 年に向けて、自動運転が始まっているであろう東京で人力車を走らせたいと思っている。外国人に「なんなんだ、この国は、最先端と前近代が共存しているぞ」と驚かせたい。人力車で競技の会場と会場間を繋ぎ、1 つのアクティビティとして 2 次交通のような役割ができると思っている。また、多くの日本の方は自分自身や日本という国を知らないことが多い。海外の方が体験するのはもちろん、多くの日本の方が日本の文化や歴史を知り見つけ直すきっかけになれば、今までよりもっと広い見方で世界をみることができる。東京 2020 が過ぎた後、残るものは目に見えるレガシー、すなわちアリーナや新しいインフラではあるが、目になかなか見えない「人」が重要なのではないかと私は考える。これからの未来を創っていくのも「人」。日本の多くの人が東京オリンピック・パラリンピックに注目するこの機会に、「人力車」を通じて日本の文化や歴史を知っていただきたい。これから日本を背負っていく若者として、まず今でよって、それぞれの点と点が繋がり 1

リオオリンピック会場にて



フランス芸術使節団と ジャン＝バティスト・ドブレの 残した功績

仁尾帚刀
(サンパウロ在住
フォトグラファー)



©Sara de Santis

2016年は、リオ市がオリンピックを開催したことで、ブラジルの歴史に刻まれ、多くの国民の記憶に残る一年となった。“お祭りすんで、日が暮れて”……その後のリオは、更なる財政難と治安悪化にあえいでおり、行く末が不安視されている。

さて、あまり知られていない史実だが、同年はフランス芸術使節団がブラジルに到来してから200年の節目にあたり、リオ市ボタフォゴ地区の文化施設Pinakothèque Cultural (www.pinakothèque.com.br)で、ブラジルの近代芸術の礎を築いたともいわれる使節団芸術家とその師弟たちの展覧会が行われた。

使節団が到来した1816年は、ブラジルがポルトガルの植民地から「ポルトガル・ブラジル及びアルガルヴェ連合王国」（以後連合王国）に格上げされた翌年にあたる。ブラジル通の本誌読者ならば、ナポレオン戦争によって追い詰められたポルトガル王室が1808年にブラジルに亡命し、リオに宮廷を遷したことはご存知だろう。

当時、世界の中心であったヨーロッパから遠く離れたブラジルに首都を構えた連合王国は、その存在を示すために国のイメージづくりを急ぐ必要があった。

使節団の由来は、摂生王子ジョアン6世の右腕で、後に連合王国の通商大臣を務めたアントニオデアラウージョ・イ・アゼヴェードが、芸術文化の発展を目的とした「科学・芸術・技能王室学校」（現在のリオ連邦大学美術学校）の創設のために、王政復古後のフランスに芸術家を求めたためだというのが通説だ。

一方、王政復古により職を失った、ナポレオン支持派の芸術家たちが、生き残りをかけて自らブラジルへの渡航を企て、これをジョアン6世が庇護したという説もある。いずれが真実かは定かでないが、使節団がその後のブラジルの芸術の発展に深く影響したことは、広く認められている。

当時フランスのアカデミーでは、理知的で形式美や写実性を尊重する新古典主義が主流で、ヨーロッパを席卷したナポレオンもこのスタイルを愛した。また、使節団の芸術家たちも新しい芸術表現として新古典主義をブラジルに持ち込んだ。

使節団として画家、彫刻家、建築家、あるいは木工、鉄工の職人など様々な分野の芸術家が

海を渡った。画家の多くはブラジルでのポルトガル王室（後にブラジル皇室）や貴族の権威の目撃者として式典や肖像などを題材とした作品を手掛け、建築家や彫刻家は王室（皇室）の必要に応じて建築や装飾、彫刻の作品を提供した。

リオ五輪開催にあわせて整備された港湾部の遊歩道「オリンピック・ブールバール」に立地する文化施設Casa França-Brasil（元税関）は、使節団建築家グランジャン・デ・モンティニーの設計によるものだ。また現在の中央に菱形を配した黄色と緑の国旗デザインの原型を作ったのも使節団の画家ジャン＝バティスト・ドブレだった。

市井に向けられたドブレの眼差し

使節団の中でその名を最も後世に残したのはジャン＝バティスト・ドブレだ。著名な『サン・ベルナル峠を越えるナポレオン』や『マラーの死』を描いた新古典主義の代表的画家ジャック＝ルイ・ダヴィッドのもとで学んだドブレは、マリア1世（ジョアン6世の母）の葬儀やジョアン6世の戴冠式など重要な式典を描くことで王室から高い評価と信頼を得たのだった。

格式高い王室の絵画に加えて、ドブレは好んで市井の人々や風景を描いた。なかでもリオでの黒人奴隷や、先住民にまつわる絵画作品は枚挙に暇がない。広場で公開処刑される黒人や奴隷市場など痛ましい場面の描写を通じて、ドブレに社会を批判する意図があったのかは分からないが、西欧から画家としてやってきた彼の目にはそれらが極めてエキゾチックに映ったに違いない。ドブレの作品は、その芸術性もさることながら、現代のブラジルに通ずる習俗や社会構造が題材とされていることで史料として高い価値が認められている。

ブラジルに15年間滞在したドブレは、描きためた作品の多くをブラジルで公開することなくフランスに持ち帰り、リトグラフ版画は1834年から1841年に三部作の画集『Viagem Pitoresca e Histórica ao Brasil』として発表した。それからおよそ100年を経て、経済が悪化した第二次世界大戦中のフランスからブラジル人アート・コレクターのカストロ・マヤが、作品の多くを買い集めて、現在は、本人の名を關したりオの美術館がドブレの作品の多くを収蔵している。

Pinakothèque Culturalでの展覧会に先駆ける昨年6月には、その『Viagem Pitoresca e Histórica ao Brasil』の新装版が発表された。連合王国、帝政時代のブラジル社会の描写が満載された全652ページは、ブラジルの歴史やアートに関心のある読者に薦めたい一冊だ。



「黒人たちに課せられた処罰」1826年 Jean-Baptiste Debret

ダイソーブラジルの挑戦

大野恵介
(ダイソーブラジル
代表取締役)



株式会社大創産業（だいそうさんぎょう）は、100円ショップのダイソーを運営する企業であり、日本国内に3000店舗弱、日本国外の26の国・地域に約1400店舗を展開している。その海外展開の一番最後がこのブラジルサンパウロである。

旗艦店オープンまで

2011年、ブラジルの内需は大きな可能性を秘めていることを調査で確認し、2012年1月にブラジル現地法人を設立した。内需が大きいがビジネスは難しいという言葉が先行し、当地でのビジネスモデルがはっきり描き切れない中、まずフラッグシップ店をオープンさせることになり、店舗物件探しに駆けずり回っていたものの、まともな物件は本当になかった。あの時期は、物件も完全に売り手市場で、店舗取得に数千万円の権利金を要求されるのも当たり前で、オーナーから酷い扱いを受けながらしらみつぶしに一軒一軒物件交渉を行っていった。何とかセントロの物件を押さえられたものの、同時に商品輸入の大きな壁に喘いでいた。

輸入までの道のり

会社を設立したものの、最も大きな障壁である、財務省連邦収税局にRadarという輸出入業者の登録をしなければならない。しかも、年間輸入金額が制限のある資格と、無制限資格の2タイプがあり、ダイソーの場合、スタートから無制限資格を取得できないと数か月でリミットを越えてしまい、商売として成り立たない。しかし、新設して間もない企業は、営業実績がないため金額制限付き資格しか与えられないのが一般的と言われており、数年の実績を伴ってから無制限の資格に切り替え申請を行うよう、収税局や知り合いの日系企業からも助言されていた。しかし、事態は深刻で、既に新店分の数コンテナはサントス港に向けて出港しており、後戻りはできない状況に陥っていた。

いろいろ調べてみると、ビジネスが如何に具体的かを当局も見ているとの話を聞き、単なる申請用紙以外に、如何に現実味のあるビジネスプランか、を徹底的に纏め、知人の紹介を受けた弁護士の手も借りて提出したところ、奇跡的に1か月でRadarの取得を行うことができた。

その頃たった一人だけであった部下と二人で飛び上がって喜んだのが昨日のここのようである。

通関の壁

これで通関の準備は整った。コンテナもサントス港に到着したが、いっこうに通関できる気配がなく2か月が経

過した。各コンテナに数百もの商品のアイテム数があり、しかも商品名見ただけでは何かわからないような商品リストの山積みのドキュメントを税関が見て、全商品一品一品のチェックと検査をしなければならないためその作業に数か月の時間と莫大な費用が掛かるとの一点張りであった。

輸入通関に長けたDespachante（通関業者）までもがとうとう音を上げたため、最後の賭けと思い、次の日に税関のトップに直接掛け合い、日本のビジネスモデルを伝え、物価高に苦しんでいるブラジルを助けるのが私共の使命である旨を強く伝えた結果、奇跡的に次の日に全てのコンテナの通関を許可してくれた。

ブラジルは不思議な国で、道が閉ざされたと思ったところからが始まりではないのではないかと感じている。

従業員教育について

社員には日本の小売業の精神や、朝礼終礼の徹底、更に従業員の数学の基礎学力の無さを少しでも補ってもらおうと、社内で作成したオリジナル計算ドリルで毎日計算の訓練をさせている。

やはり毎日の労働がキャリアアップに繋がりが楽しいものと少しでも思ってもらえれば、離職率の低下や労働問題も回避できると考えており、自然とこのような我々の考えが浸透しているのか、店頭でレジ前にできた長蛇の列を明るく効率良くさばくブラジル人スタッフを見て、彼らの成長を嬉しく感じている。

経営理念について

現在、270名程度の従業員数であるが、彼らの各家庭環境を知ると、日本の貧困などとは比較にならない状況に身を置いて暮らしている者も数多くいる。

そんな彼らと共にダイソーという小売業を発展させていくには、彼らにも成長してもらうことでしか会社の発展はない、というのを身を持って感じている。それ故、ブラジルダイソーでは盛和塾会長でもある稲盛氏の経営理念でもある、「全従業員の物心両面の幸福を追求する」という目標を常に持ち、彼らと共に成長するよう努力している。

今後の展開について

2016年末現在、フランチャイズ含めて22店舗を展開。そして、消費者ニーズが非常に大きかったEコマースを12月から開始した。

2017年以降も、毎年10店舗近くの出店をし、日本の小売業をより身近に感じてもらえるようになりたい。



ブラジル経済の現状と将来への期待



松田純一
(弁護士。松田総合
法律事務所所長)

連載

ビジネス
法務の肝

ブラジルは GDP（国内総生産）や海外直接投資受入額の世界的順位は高いが、貿易額は輸出入とも比較的小さい。ブラジルの貿易協定はメルコスールに代表されるラテンアメリカ域内に留まり、貿易ではかなり遅れを取っている。現状と将来への動きを見てみよう。

ブラジルの経済・貿易と世界貿易の趨勢

国際通貨基金（IMF）推計によるブラジルの名目 GDP（2015 年）は、1 兆 7,773 億米ドルで世界第 9 位。2014 年は第 7 位であったが、その順位をインドと交換した。経常収支（2015 年）は前年比▲ 3.32%、▲ 589.10 億米ドルに落ち込んだが、GDP に示される経済規模は依然として大きい。海外直接投資受入額（2014 年）は 624.95 億米ドル（第 6 位、193 カ国）であり、市場規模や成長性の魅力を裏付けている。一方、輸入額（2014 年）は 2,391.5 億米ドル（22 位、195 カ国）、輸出額は 2,251.0 億米ドル（25 位、同）という物足りない水準にあり、輸出拡大は重要な課題と言える。

さて、戦後世界経済における最も特徴的な事実は貿易の著しい拡大テンポである。『1960 年時に 1,300 億ドル程度であった世界の貿易（輸出）額は、1990 年時には 3 兆 5,000 億ドル、2012 年には 18 兆ドルへと増えた。最近の四半世紀間に世界貿易額は五倍強へとふくらみ、21 世紀に入っの 10 年間に三倍へと加速度的に増えた。海外直接投資（ストック。累積額）は、1970 年の約 109 億ドルから、2000 年には 8 兆ドル、2012 年には約 24 兆ドルへとめざましく伸びた。』（西川潤 早稲田大学名誉教授著 新・世界経済入門 21 頁＝岩波新書 2014 年 4 月 18 日発行から引用）

期待されるブラジルのリーダーシップ

ラ米全体の名目 GDP の 35% を占めるブラジル経済の落ち込みが主因となり、2016 年のラ米成長率は前年に引き続きマイナスとなる見通しだ。こうした中、自由貿易派のアルゼンチン・マクリ大統領は、中南米経済共同体の「メルコスール（南米南部共同市場）加盟国：ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、ベネズエラ、ボリビア」と「太平洋同盟 加盟国：メキシコ、コロンビア、チリ、ペルー」の統合も意識し、

メルコスール活性化やメルコスールと日本の FTA（自由貿易協定）締結について提言した。FTA・ETA への参加や拡大は産業の多様化と発展につながり国際競争力を強化するが、ブラジルのテメル大統領も自由貿易に前向きであり、ベネズエラでも保護主義的な通商政策を掲げる左派が弱体化している。中南米での政治体制の変化を踏まえた経済統合推進の動きは、成長力を高める施策として歓迎したい。

ラ米諸国は一次産品価格下落や中国経済減速による経済停滞からの脱却を目指す、経済的影響力の大きいブラジルには、FTA・ETA でのリーダーシップ発揮が期待される。経済連携・統合以外の成長への施策として、ブラジルは特に「インフラ整備」を進める必要がある。世界経済フォーラムによる競争力調査 2014-2015 によるブラジルのインフラ総合整備度は 144 カ国中 120 位と極めて低い。

ブラジルとの契約への対処

日本とブラジルの付き合いは、グローバリゼーションの進展とともに更に深くなり、民間レベルでも大型取引が増え、契約内容も高度で複雑となるだろう。

ところで、ブラジルの法令は作成前に事前調査を行う慣行がないため、一般的に明瞭性や技術性の欠如が多いと言われる。外国人に不利なものもあり得るし、法的安定性も十分とはいえない。また、異議申し立ての精神が根付いており、頻繁に訴訟を起こす傾向にある。労働法が極めて労働者保護的なことは良く知られているが、租税法では、納税者が疑問を抱いている法令の適用回避のために訴訟を起こす傾向にある。

こうした問題は残念ながら一朝一夕には解決できない。経験豊富なブラジル人専門家の助けを得て、取引開始前に相手先企業や対象取引について潜在的なリスクレベルを評価し、相互に合意した全ての主要事項を書面で確認し（基本合意書）、契約締結前に各事項の履行期限を設定すること、更に相手先には柔軟な態度で臨むことが望まれる。契約書式は自前を利用したいが、相手先書式を利用せざるを得ない場合は、Deviation List（相手先要求に沿うことができない事項を記したリスト。代替案があれば併せ記す）の提出により誤解を避けることが必要である。

ブラジル M&A の留意点について

片岡万枝
(PwC アドバイザリー合同会社・
シニアマネージャー)



ブラジルも漸く、インフレ率の低下等、各種経済指標が景気の底を打ち回復基調に入り出したことを示し始めた。最近、アメリカの大手食品会社によるブラジルの食品会社買収（約 400 億円）が発表され、産業によっては早くも攻めのスタンスがみられるようになっている。アメリカ大統領選の結果がブラジルに与える影響はまだ不透明であるが、輸出依存度が低くアメリカへの輸出割合が低い点、資源価格の回復がみられる点は、ブラジルの経済回復の追い風要素である。そのような環境もあり、棚上げしていたブラジル案件をそろそろ再検討する時期と言えるかもしれない。そこで、今回と次回は、ブラジル M&A の留意点を指摘しておきたい。

ブラジルにおける デュー・ディリジェンス

① サービスプロバイダーの問題

ブラジルにおけるデュー・ディリジェンス（買収対象企業の不動産などの資産調査）において、必ずと言っていいほど検出される問題点としては、サービスプロバイダー（請負によるサービス提供者）の問題がある。実質的には従業員と同様に働いているのだけれども、サービスプロバイダーとしての請負契約になっているケースである。雇用主側にとっては、税金や社会保険料等の負担額を減らせ、被雇用者側にとっては手取りが増える理由から、双方合意のもこのような形態がとられることが多い。しかしながら、被雇用者が退職後、“本当は従業員だったので、その分の社会保障等を返せ！”と雇用主を訴えた場合、多くの場合、雇用主側に不利な判決が出るケースが見受けられる。

② 労務訴訟の問題

アメリカ並みに人口あたりの弁護士数が多いブラジルにあっては、訴訟に対するハードルは低い。上記①に限らず、労務訴訟は日本に比べ多い環境にあるため、投資対象の会社が労務訴訟を抱えていたとしても驚く

必要はなく、その業界や地域の標準的な水準に比べ高いのか、低いのかを確認することがまず重要である。労務訴訟の対応費用は、ブラジルでビジネスを遂行する上で必要コストである。

③ 税務訴訟の問題

また、税務についても当局と見解の相違があった場合、双方合意の上修正申告をおこなうような仕組みではなく、仲裁・裁判のプロセスを経ることになるため、税務訴訟を抱えているケースも珍しくはない。かつてはどこの会社でも行われていたことが、最高裁で判決がでて、ある時点を境に違法扱いなるケースもある。税務訴訟については、そのような判決が出ているような裁判でないかどうか、の確認が必要となる。

④ 二重帳簿の問題

監査を受けていない小さな会社の場合、二重帳簿が行われていることは珍しくない。二重帳簿を可能にするには、売り手側と買い手側に、取引を隠ぺいする協力者が必要で、簿外の売上があるということは、簿外の支払もあるということなので、双方の税務インパクトについて留意しないとイケない。

典型的な税務や労務問題の解決策

税務や労務に関する問題解決策としては弁護士がリスクアセスメント（リスク評価）をしてその可能性を判定、会計士がコストを試算し、その結果をもとに問題の軽重を判定するというのが一般的である。ブラジルの場合、税務や労務に関する 이슈 は多いものの、顕在化するかどうかはわからない。一方で、多くの税務・労務税務の項目は、一部例外を除き、5 年でその納税義務がなくなる点も認識しておきたい。

ブラジル投資においてリスクをゼロにすることは難しいけれども、次善策としての対処をすることでリスクを最小限にしながら、投資の検討を進める必要がある。

社会統合の炎を象徴する オリンピック聖火

小川彰夫
(ニッケイウェブ主宰)



私はサンパウロで生まれ育った生粋のブラジル人だ、と確信しているが、1991年、五十路の坂にさしかかった時、頭の中で革命が何故か起きて、日本語を再び学習したいとの思いがほとばしった。何人かの知人をお願いして、誰か女性の日本語の先生がいらないか、と探してもらったのだ。

すると、一人の素敵な先生が現れたのだが、素敵すぎてなんと、1997年に彼女と結婚することに。このワイフ・先生のおかげで、日本語を話すのは上手になったが、読んだり書いたりとは相変わらず苦労している。今、豊かな人生を歩んでいられるのも彼女のおかげだが、ユダヤ、アラブ、イタリアといった「非日系人」が主体だった私の交友関係もゆっくりと変容して、今ではいつの間にか日系人のなかにいることが多くなっている。

こうして日系社会との絆が深まったため、ジャカレイ・ジョギング財団会長、ブラジル日本文化福祉協会広報部長、副会長を委嘱されることになった。この文協の会長選挙には三回出馬して、三回敗れたので、もうチャレンジする意志はなくなり、文協は「卒業」したと思っている。

私は、二つのポータルサイト www.nikkeypedia.org.br と www.nikkeyweb.com.br を10年ほど前に立ち上げ、今でも主宰している。このおかげで、日産ブラジルが私をオリンピック聖火ランナーに選出してくれた。また、ニッケイ新聞やサンパウロ新聞は私を「日系社会を代表する聖火ランナー」と評してくれた。実に名誉なことだと思っている。

2016年9月25日11時10分、セナ・マドゥレイラ通りで聖火を引き受ける時、70名ほどの知人たちが応援に駆けつけてくれた。聖火ランナーという重責と名誉を感じつつ朗らかに歩を進めたが、無事しっかりと次の聖火ランナーに聖火トーチを引き継ぐことができた。といっても、大観衆に囲まれて空中に浮かんでいるかの如き幻覚に陥り、なんと揺れんばかりの感動に浸った次第だ。

JICA(国際協力機構)から、この聖火トーチをオリンピッ



©portalnikkei.com.br

ク展示会向けに借用したいとの連絡をいただいたが、私は「お貸しするのではなく、寄贈します」と即答した。というのも、さほど訪問者が多くない我が家に置いておくよりも移住資料館に保管されたほうがはるかにいいからだ。聖火トーチを手渡すために JICA サンパウロ事務所へ向かった時、多くの人がこの聖火に直接触れたり、握ったりしたいのだろうな、と思ったものだ。

その展示会の最終日、ご招待を受け JICA 横浜で講演をすることになったが、展示場を訪問し、聖火トーチやランナーのユニフォームが実に丁寧に保管展示されていることに感激した。講演会には60名ほどの方々に来ていただいたが、「日本で、日本人に対して話すのだから日本語でやるしかないな」との責任感をひしひしと感じたものだ。

私の演題は、日本の最大にして恐らく唯一の資産である、日本人について、であった。日本があるのは、日本人のおかげだからだ。

これからの将来、我々の多くは元気パワーとエネルギーを保持しながら100歳まで生きることになるだろうが、そのためにも、我々は自分の健康に配慮し、自分のことだけでなく他者のことまで気配りできるようチャレンジしていくべきだろう。

本誌読者の皆様に再認識していただきたいお願いがある。ブラジルで生まれた日系人で dekasegui として日本にやってきた人たちの多くが日本での永住を決断するようになっていくが、もし彼ら日系人を日本人として認知していただければ、彼ら日系人は日本の人口増加係数の改善に貢献することになる。ブラジルでは移民一世やその子孫たちのおかげで、日本文化を普及する日系団体が400以上も活動を続けている。こうした団体のパートナーとなれば、日本文化の普及・教育運動を一層展開できるようになり、ひいては、こうした日系移民・日系人の活動によって、将来、ブラジル人の慣習や行動、より広く言えばブラジル文化、のなかに日本文化の痕跡を残すことになると思えるからだ。

最後になったが、改めて強調しておきたいことは、こうした日系団体がパワーを維持できているのは「婦人部」のおかげとあってよい、ということであり、本当に日系女性たちが一生懸命に働いてくれることで、婦人部も団体全般もしっかりしてくるのだ。

それからもう一つ、横浜の講演で私のワイフのことにきちんと言及しなかったことを猛反省している。オリンピック聖火イベントが成功したのは、なんといっても、彼女のおかげだからだ。多美子さん、改めてありがとう。

(編集部訳、原文はポルトガル語)



現代の“アマゾネス”

武田真由子
(NPO法人クルミン・ジャポン プログラム・オフィサー)

ブラジル女性といえば、情熱的で、愛情表現たっぷり、気が強いというイメージがある。でも、アマゾンの奥地で会う女性たちは、そのイメージと少し異なる。初対面でアブラッソやペイジョ(抱き寄せてキスをする仕草)をしない。これは男性も同じ。そして、人前では旦那さんを立て、お客さんの前では黙って皆の話を聞いていることも多い。その振る舞いに、先住民族の名残のある顔立ちが加わり、どこかアジアを彷彿させる。

日本人女性と大きく異なるのは、そのたくましさである。よく焼けた肩や腕、ふくらはぎの筋肉はアスリートのように美しく、立派である。重たいバナナの房を肩に担ぎ、25メートルの崖を飄々と駆け上がっていく。もちろん、ジムに行くことも、運動をするという概念も全くない。

私もアマゾンにしばらく滞在していると、何だか自分の生命力が上がってくるのを感じる。30キロ近い荷物を背負い、川の上の細いベニヤ板を渡り、ドロドロの崖を登り、ジャングルを歩きまわっているうちに、東京でのヒール生活や舗装された道ばかり歩くことで衰えたバランス感覚が、なんだか蘇ってくる感覚を覚える。背中や腕の筋肉も、一回り大きくなっている。

農薬や肥料も使わず育てられたアマゾンのナチュラルな果物や野菜、新鮮な魚、しめられたばかりの鳥や豚といった食事のおかげもあるかもしれない。ここでは、女性だからといって重いものを持つことを免除されない。初めは外国人の私を気遣ってくれることもあるけど、町におけるレディーファースト精神とは明らかに異なる。アマゾンでは、助け合いの文化が発達していると同時に、個人主義の文化も強い。個体としての生存能力が高くないと生きていけない、という環境に適応してきた結果なのだろう。

長年アマゾンに暮らしてきた私の上司が言っていた。「アマゾンの人々はオンサ(ジャガー)のような存在だ。見た目や、性質や、そのたくましさも」。日本に帰ってくると、折れそうに細い女性をよく見かける。それでもさらにダイエットに励もうとし、筋肉がつくのを嫌がる人も多い。日本社会で求められる女性の生存能力は、たくましさとは無縁のようである。それでも私はなぜか、アマゾンの女性が持つ、生命力の輝きのような美しさに憧れるのである。

ジャーナリストの旅路

15年ぶりに見つめ直すブラジル

山本太一
(毎日新聞外信部記者。03年入社。16年4月から現職)

入社以来、ほとんど警察回りを担当してきた私は昨春、国際報道を担う外信部に異動になった。忙しさを言い訳にしてあまり関心を払ってこなかったが、異動後、東京にしながら注目しているのはブラジル関連のニュースだ。なぜなら、学生時代に日本ブラジル交流協会を通じマナウスの小中学校で1年間の研修を受けた経験があるからだ。熱帯気候の中、ポルトガル語もろくにしゃべれない日本語教師として、生徒と向き合い、大汗をかく毎日だった。その日以来、15年ぶりにブラジルを見つめ直している。

私が入社した03年、貧しいノルデスチの農家出身で、小学校も卒業していない労働党のルラ氏が大統領に就任。カリスマ的な人気を誇ったルラ氏は、ワールドカップや南米大陸初となるリオ五輪・パラリンピックの誘致に相次いで成功した。経済も好調で新興5カ国(BRICS)の一角として、ブラジルは世界の注目を浴びた。内政でも歴史的な課題だった貧富の格差は正のため、貧困層向けの支援策「ボルサ・ファミリア」を実施し、中間層が大幅に拡大した。バトンを引き継ぎ、ブラジル史上初の女性大統領になったルセフ政権下でもこの流れは続いた。

ところが、昨年は暗いニュース続きだった。長引く資源安を背景とする景気低迷で15年と昨年は連続マイナス成長の見通しだ。ラバジャット事件の捜査は政権中枢に及び、市民の政治不信は頂点に達した。景気低迷と政治不信の責任を問われる形でルセフ氏は弾劾、罷免され、労働党政権に終止符が打たれた。ブラジル躍進の立役者だったルラ氏はラバジャット事件で起訴された。残念に感じるのは、せっかく浮揚した一部の中間層が貧困層に逆戻りしたとされる点だ。

おぼろげになってしまったが、自分のブラジル体験で覚えているのは、非識字率の高さの背景を探るため、毎週のように通った地域のコミュニティーセンターでの出来事だ。そこでは、自分と同年代の大学生ボランティアが親世代の人たちに「アー、ペー、セー」から文字の読み書きを教えていた。中でも「聖書を自分で読みこなしたい」と必死に学んでいた熱心なクリスチャンの「チア」のことは忘れられない。貧しさゆえに学校にほとんど通えなかったという。チアの15年はどんなものだったのか、そんなことを考えながら、今年は良い1年になることを心から願っている。

追悼：宮尾進さん ブラジルを考え続けた哲人の死

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



宮尾進さん

ブラジル日系社会・移民史を調査研究するサンパウロ人文科学研究所（以下、人文研と略称）の理事、事務局長、所長として活躍された宮尾進さんが、2016年10月30日亡くなった。享年86歳。

二宮正人弁護士（サンパウロ大学教授）は、筆者との会話において「宮尾さんのように存在感があってスケールの大きな日系知識人は、もう出ないだろう」と語っていたが、宮尾さんから何回も激励された経験を持つ筆者としては、この哲人について今一度再考することは義務であり、このささやかな拙稿を通じて哀悼の意を表したいと思う。

1930年、サンパウロ州アリアンサ移住地で生まれた宮尾さんは日系二世であるが、9歳の時、宮尾家の跡取りとして両親の出身地長野へ“里帰り”する。第二次大戦が始まってしまったこともあって、ブラジルに帰国できなくなり、日本で大学教育まで受けることとなった。信州大学文理学部で専攻したのは哲学で、なかでもサルトルに惹かれた由だが、広く人文科学全般を学び、生真面目に戦後デモクラシー精神を吸収した哲学徒だった。そんな宮尾青年がブラジルに帰国できたのは、1953年、敗戦国日本が、サンフランシスコ条約によって独立を回復した1952年の翌年だった。

教師業を三年やってから、コチア組合の『農業と協同』誌や『ブラジルの農業』誌編集長と20年以上にわたり編集のプロとして手腕を発揮したが、並行して、人文研に創立時からコミットし、さらにはコロンビア文学運動でも活躍していく。

人文研のルーツは、終戦直後の在ブラジル日系社会を震撼させた「カチ組マケ組」抗争に遡る。時局を認識していた「マケ組（認識派）」を、情報が隔絶した環境下で日本の敗戦を認められなかった「カチ組（信念派）」のテロリストが襲撃・暗殺する事件が、1946年から47年にかけて続発したが、“国賊”扱いされた「マケ組」の人たちは護身用のピストルを携帯しつつ、勉強会的な集まり「土曜会」を発足させる。これが発展的解消して「サンパウロ人文科学研究会」となり、研究法人「サンパウロ人文科学研究所」に改組されたのが1965年であった。

アンドウ・ゼンパチ、鈴木悌一、半田知雄、河合武

夫、斉藤広志といった異才たちに囲まれて鍛えられた宮尾さんは、数多くの調査・研究に従事するが、宮尾さんの数多い業績のなかで、一番polemicalな論稿は、「移民空白時代と同胞社会の混乱」であろう。これは、『ブラジル日本移民八十年史』（1991年）の第4章として書かれたもので、のちに加筆され単行本『臣道聯盟（移民空白時代と同胞社会の混乱）』（2003年）となるが、官憲側（DOPS 政治社会警察）の調査・資料を徹底的に渉猟したうえでカチ組マケ組抗争の実態を解明した論文だ。カチ組テロは臣道聯盟の過激分子の指示で聯盟メンバーが実行したものと結論付けたため、この宮尾説に対する批判は今日に至るまで続けられている。（例えば、外山脩『百年の水流』では、丹念な関係者調査によって、テロを実施した「特攻隊」は、「特行隊（特別行動隊）」であって、聯盟とは無関係である、と主張している。この論争については紙幅もないため別の機会に論じたい。）

ここで、宮尾さんの考え方がよく出ている一文を引用しておきたい。

「まさに（日系社会は）ボーダーレスの状態であり、それを憂慮する一世老移民の人たちもいるが、視点を変えてみれば、人が集まると人種紛争、宗教闘争などの絶えない世界の中で、白・黒・黄色とさながら人種の見本市のような国柄でありながら、いまだかつて一度もこうした争いがなく、あらゆる人種が自然に融合していつているこのブラジルは、それこそグローバル化を目指すこれからの世界の、モデルたり得る国といえるかもしれない。

あらゆる人種を融合した新しい人種、新しい文化の誕生に、日系人も参加していつているのだと考えれば、「日系人」の埋没を嘆くことはないと思うのだが、移民一世世代にとっては、そう簡単なものではないらしい。」（『信濃毎日新聞 1998年9月4日』）

2013年6月、「平成25年春の叙勲」で旭日双光章を受章された時、ニッケイ新聞の取材に対し「自分が生きる日系社会の実態に関心があり、調査をしてきただけ。これからも研究を続けていきたい」と生真面目に返答しているが、これも如何にも宮尾さんらしい。

「日系ブラジル人」として日系社会の変容を冷静に評価し、ブラジルの価値をポジティブに考え続けた哲人は、実に実に大きな存在であった。合掌。

政界におけるプロテスタント系新興宗教の台頭

10月31日及び11月1日付フォーリャ・デ・サンパウロ紙が、今般の全国統一地方選挙におけるプロテスタント系新興宗教の台頭について報じている。概要は以下のとおり。

1. 因果関係は明らかではないが、2003年のPT政権誕生以降、プロテスタント系新興宗教の影響力が急速に拡大している。ブラジル国民の宗教に関する世論調査によれば、2000年と2015年を比較すると、カトリック教は74%から55%まで減り、プロテスタント系新興宗教は15%から30%まで増えている。政治家はこの大多数の有権者を無視できなくなっており、ブラジル共和党（PRB）の支持母体となっているユニバーサル教会の政界への躍進は大きな波紋を呼んでいる。

2. ブラジルの地方都市では、すでにプロテスタント系新興宗教の市長がいたが、リオのような大都市での市長誕生は、クリヴェラ次期市長（PRB）が初めてである。同氏の当選の背景にはユニバーサル教会の強い支持があった。同教会信者による支援は資金面等で高度に組織化されており、候補者と有権者との結びつきも伝統的な政党よりもはるかに強い。

3. 今般サンパウロ市長選有力候補者であったルソマノ氏はカトリック教を信仰するが、PRBから立候補した。社会的影響力が強く、カリスマ性の高い同氏の擁立はユニバーサル教会の世俗化の動きと見てとれる。リオ市長選決選投票も有権者の左派政党離れの票が同教会にとって弾みとなった。

4. 長年ユニバーサル教会は、信仰の多様性を巡り、他の宗教団体や同じ新興宗教の別宗派と揉め事を起こしている。政治家が密に宗教団体と結びついている点で危険性が伴う中、クリヴェラ次期市長就任後は、中絶やLGBT等の政策を巡り、賛成派と反対派の動向に注目が集まることになる。

5. 今般のリオ市長当選により、ユニバーサル教会は2018年大統領選挙への展望を描いていることは確かである。可能性としてジャイル・ボルソナロ連邦下院議員（キリスト教社会党PSC）の名前が挙がっている。また、長期的には行政権のみならず司法権を司ることも視野に入れている。しかし、教会だけの力では限界がある。他の候補者と争うに当たり、いずれは政党構成員の支持

も必要となってくる。

大統領府発表：テメル政権6か月の成果

11月12日、大統領府は、HP上に、テメル政権発足から6か月の間の成果として、主要な政策のレビュー及び評価を発表した。対外関係については、概要以下のとおり。

(1) 日本との関係では、10月のテメル大統領訪日により、日伯戦略的パートナーシップを一層強化できたとして強調。天皇陛下御会見、安倍総理との首脳会談、ビジネス界との会合、インフラ覚書署名に言及。

(2) 通商面では、日本が対伯特惠関税を適用し、品目によっては関税率100%に及ぶものが含まれており、おおきなメリットであるとしている（同様の特惠をロシアから得ていることにも言及）ほか、メルコスール・EU連合協定交渉が再開しており、次回交渉会合を2017年3月ブエノス・アイレスで予定であり、EUとは、最近得られた合意により2億5千万リアル（約75億円）に及ぶ伯農産品輸出見通しがあることを強調。その他、インドとの貿易が3倍増にもなり得る増加傾向にあること、生鮮牛肉の米国市場での解禁合意、アルゼンチンとの間で原産地証明に係るコスト削減の合意が得られたことなどを、成果として紹介。手続き簡素化を中心としたブラジル自身の輸出促進策を検討していることにも言及。

(3) その他、次期戦闘機グリッペン開発を中心とした戦略的連携をスウェーデンと結んだこと等を紹介。

農業：穀物生産量、史上最高となる見込み

中西部における天候条件に恵まれたことから東北部における旱魃による減産を十分カバーできる生産量が見込まれている。CONAB（供給公社）の最新発表によれば、2016/2017年度の穀物生産量見込みは、210~215百万トンとなっており、これは前年比約15%の増となり、ブラジル史上最高の穀物生産量となる。

なかでも大豆の生産増が顕著であり、見込み生産量101~104百万トンは前年比6~7%増となり、初めて1億トンの大台に達することになる。世界最大の大豆生産国である米国と肩を並べるレベルになりそうだ。また、トウモロコシ（前期収穫分）も26~27百万トンと前年比7%増が見込まれ、米は前年比13%増、フェイジョン（インゲン豆）は前年比19%増といずれも豊作の見込みである。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『世界の豆料理』

(執筆:長谷川律佳、池田愛美ほか)

フェイジョアーダやアカラジェのうまさそうな写真を眺めては涎を垂らしそうになる人にお薦めの、豆料理図鑑だ。中東、アフリカ、米大陸、ヨーロッパ、アジアの郷土食あふれる120のレシピに要領よい解説と写真が並載されており、アーブグーシュト(イラン)、カスレ(南フランス)、コズィード(ポルトガル)、ファバーダ(スペイン)、フェイジョアーダ(ブラジル)の共時的類似性を再発見しながら、豆料理の豊饒さを確認することになる。

(誠文堂新光社 2016年10月 240頁 2,800円+税)

『大統領の冒険』

(C・ミラード著、カズヨ・F訳)

探検家としても有名な、米国第26代大統領セオドア・ルーズベルト(1858-

1919)が、再選に敗れ、1914年アマゾン奥地での「謎の川」調査行に出かけて死に損なったことは、比較的知られている。本書はノンフィクション作家による、このアマゾン探検物語の再構成で、読み出すと引き込まれる面白さだ。ただ残念なことに、翻訳はイマイチ、地名・人名の基本的なチェックすら出来ておらず、読者は誤記の連鎖に苦笑いしながら読むハメに。

(エイアンドエフ 2016年4月 478頁 2,600円+税)

『六十八歳の青春裸像』(奥瀬純一著)

鉱山王が、なぜ七人の女房に逃げられたのか、というサブタイトルのドキュメンタリー作品だが、ブラジル北部・東北部のパラー州、ゴイアス州、バイア州などで20数年にわたる宝石採掘業で財をなした主人公のお話だ。七人目の女房エリカとの出会いを中心に小説タッチで書かれているが、主人公の中里貢一には実在のモデルがいる由。荒唐無稽なお話やラブストーリーが展開されていくが、大衆小説の如き読後感が残る。

(メディアパル 2016年8月 270頁 1,300円+税)

『海のリテラシー』

(田中きく代、阿河雄二郎、金澤周作、編著)

複数の歴史学者による大西洋海域史論集であるが、「北大西洋海域の文化共同体」の多様性を明らかにすべく、奴隷貿易、貿易商人、黒人船長、漂流譚などの事例研究を論述している。第4章、海運業界紙の市況展望、では19世紀前半の中欧オーストリア帝国の貿易を明らかにしているが、主要貿易相手国第5位がブラジル(主要品目:コーヒー、砂糖)で、8位の米国よりも貿易額が大きい。ちなみに1位はイギリス、2位トルコ。

(創元社 2016年8月 316頁 3,400円+税)

『ブラジル日系移民の教育史』

(根川幸男著)

100年以上にわたってブラジル各地で行われてきた日本語教育の実相を歴史社会学の視点から解明した超労作である。教育史をマクロで捉えてから、いくつもの事例を詳細に検討していく。初期の日系教育機関であった大正小学校、聖州義塾の実態を明らかにし、代表的教育者、小林美登利、岸本昂一、両角貢一の生涯を掘り起し、子供(生徒)たちの視点から日系教育を見直している。出色のノンフィクション作品としても読める学術書だ。

(みすず書房 2016年10月 632頁 13,000円+税)

!!「びっくり豆知識」!!

ブラジルはフィデルの陰の応援団?

「出たい奴は出ていけ!」とフィデル・カストロ国家評議会議長(当時)は叫んだ。1980年、キューバのマリエル港から亡命希望者が半年間だけ出国が許された。その数なんと12万人余。悪人、犯罪者も放り出されたと言われ、米マイアミは大騒ぎとなった。亡命を認めたリーダー、フィデルが16年11月25日に亡くなった。

そのマリエル港が改修を終え、経済特区として生まれ変わった。合計19社が進出、10社が外資系だ。日本では知られていないが、この特区はブラジルが作ったようなものだ。カネの面では国立経済社会開発銀行(BNDES)が09年から13年まで8億ドルを融資した。その条件は高リスク国なのに期間25年、金利は年5~7%程度。14年の落成式にはルセフ前大統領が出席している。

加えてBNDESはハバナ国際空港や地方空港の拡張にも期間15年、年7%程度で融資した。建設主体がいずれも汚職問題で揺れるブラジルのオデブレヒトだったのが気になるが、キューバ側にとっては有り難い話だろう。

明らかに「ルラ(03年から)~ルセフ(2010年から16年)」というPT(労働者党)の左派大統領はフィデルに心酔した

人たちだ。そうでなければキューバの最も先進的な外資導入プロジェクトのマリエル港改修にブラジルが協力することはなかった。歴史的にはマリエル港は大量亡命事件の現場だが、そこが「公式に」開かれた港になるのは象徴的でもある。

ブラジルは良く言えば全方位外交、悪く言えば八方美人。つまりどんな国、どんな人とも平等に仲良く付き合う。そんな特質が表に出たのが対キューバ外交だったように思う。

フィデルの死去はアメリカ、ロシア、中国などには大きな衝撃となったが、ブラジルではそこまで関心は高くなかったようだ。それはそうだろう。キューバ革命は59年だし、その首謀者のフィデルは08年から政治の中核から退いている。しかし、ブラジルの現代史をながめると、キューバとの関係は深く潜航して影響を受け合っていたように思う。60年以降のクビチェック、クワドロス、ゴラルル(ジャンゴ)各大統領は少なくとも反キューバではなかった。

ブラジルは64年の軍事クーデターでキューバと断交するが、86年に国交回復するまで「何もなかった」ことになっている。そうだろうか。実は底流ではしっかりとつながっていたのではないか。(W)

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイシア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。

「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイシア) 運営:株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com TEL03-4360-8627 HP: <http://brasia-j.com/>

日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

1月
開講

ポルトガル語冬期講座 申込受付中

充実した講師陣により「初心者コース~上級コース」まで全5コース開講予定

当協会では、「楽しく学ぼう!学んで話せるポルトガル語!」をモットーに実用ポルトガル語講座を開講しております。

冬期講座は、2017年1月より、充実した講師陣で、下記により開講します。

- 受講料 【会 員】22,500円(税込)
- 会 場 日本ブラジル中央協会事務所 東京都港区新橋1丁目18-2 明宏ビル本館5階
- 申込方法 協会ホームページの申込フォーム(<http://nipo-brasil.org/portugal/request/>)よりお申込ください。※受付は申込先着順です。

協会イベントのご案内

2/4

ワークショップ バレンタイン企画 アマゾン・カカオを使ったチョコレート作り

講 師: 武田 真由子 氏
(東京大学大学院 新領域創成科学研究科 / クルミン・ジャパン)

ブラジルのアマゾンの豊かな大自然の下、農業や化学肥料を使わず育てられたカカオが、とても美味しいチョコレートに変身します。近年、多くのポリフェノールやミネラル等が含まれることから、高カカオチョコレート健康効果に注目が集まっております。そのカカオ、原産地は実はアマゾンなのです。アマゾンの恵みで育まれた本来のカカオの味を味わってみませんか?



日 時: 2017年2月4日(土) 14:00~16:30

参加費: 4,000円(材料費込)

場 所: カフェ・ド・セントロ

住 所: 東京都千代田区丸の内3-1-1 帝劇ビル B2F

電 話: 03-3216-7911

交 通: JR有楽町駅、都営三田線日比谷駅B3出口帝国劇場直結

※その他、詳細はホームページにてご案内します。

皆様のご入会、心よりお待ちしております

法人・個人 新規会員募集中

会員数 2016年12月現在
法人会員 約122社
個人会員 約286名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」
にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会 員 特 典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、
参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年 会 費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円/ (2口以上) 個人会員 1口 10,000円 (1口以上)

お申込みは
こちらから

《日本ブラジル中央協会公式HP》
<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検 索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。



スペイン・中南米との架け橋として20年 スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室

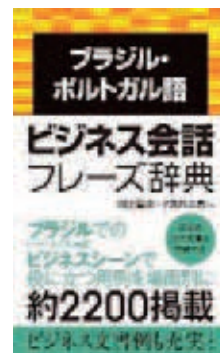
www.hispanica-academia.org

- ・通学
- ・通信添削
- ・オンライン※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに
中南米の最新ニュースを日本語で

- ・中南米経済速報（週刊）
- ・政治・治安情報“CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に導く語学力習得をとことんサポート。実践的なコミュニケーション力を最大限にきだすレッスンをアレンジします。

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル 1F（銀座線・南北線「溜池山王」8番 駅出口前）

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org



BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL
YOU
CAN
EAT | 食
べ
放
題

予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

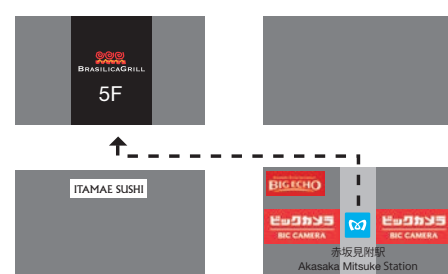
赤坂見附駅
徒歩2分



赤坂駅
徒歩6分



永田町駅
徒歩6分



溜池山王方面 Tameike Sannou
赤坂見附駅 10番出口 Akasaka Mitsuke EXIT 10
銀座線 丸の内線
青山一丁目方面 Aoyama Ichome
Ginza Line Marunouchi Line

驚き！

感動！！

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、エティハド航空、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、タム航空、ラン航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル
（本社）東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号
社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員
TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail : info@alfainter.co.jp



亀は万年、鉄は永遠。



鉄は、機能的な素材です。強く長寿命でどんな形もつくりことができ、古くなったら取り替えも利く。スクラップになっても、何度でも新しい鉄に生まれ変わります。新日鉄住金は、鉄のライフサイクルを見つめ、より錆びにくい鉄など、さまざまな可能性を追求。原材料から環境負荷の少ないものを選び、多くのエコプロダクツも開発してきました。一説では、鉄はその強度もまだ20%程度しか発揮されていないといわれています。もっとロングライフで、もっとエコロジーな鉄へ。私たちは世界最高の技術力で、秘められた鉄の可能性を引き出していきます。

鉄の「可能性」を考える。私たちはライフサイクルで環境を考えます。

世界の鉄へ しんにつつすみきん

 新日鐵住金